

陶淵明詩文における自己肯定的一人稱について

大 立 智 砂 子

1. はじめに

陶淵明作品では、「我」「吾」が多用されている。陶淵明と時代が近く、現存する詩数が比較的近い謝靈運と比較すると、陶淵明詩における「我」「吾」の使用は、謝靈運よりもずっと多いことが分かる。陶淵明の一人稱を概観すると、その一人稱は、まず、陶淵明自身を指すか、それ以外の人を指しているのかによって二分することができる。本論文では、一人稱が陶淵明自身を指す場合について扱うこととする。一人稱が作者以外の他者を指しているもの、特に假託表現における一人稱については「陶淵明の假託詩における一人稱表現」（早稻田大學中國文學會『中國文學研究』第三十三期 十四頁―二十八頁 二〇〇七年十二月）に述べたので、そちらを参照されたい。

2. 対象に着目した分析

本論文では、まず一人稱「ワタシ」が、どのような事物と相對して使用されているのかについて概観する。次に、「讀山海經」一に見える「吾廬」「我書」「我園中蔬」といった、植物や住居に一人稱が付加されているものに着目して考察を行う。

陶淵明作品における一人稱を集め、「ワタシ」と檢證してみると、一人稱には次のようなものがあるといえる。

- ① 二人稱「アナタ」と對比して、「ワタシ」と言っているもの
- ② 二人稱「アナタ」以外の誰かと對比して、「ワタシ」と言っているもの

中國詩文論叢 第二十八集

③ 運命や時間など、自然の運行と對比して「ワタシ」と言っているもの

どれも、「ワタシ」が自分自身を指す言葉であることに變わりはない。しかし、字義そのものは一人稱「ワタシ」でありながら、對象相手が變化することによって、そこで「ワタシ」がどのように表現されているのかは異なっている。

まずは、①の、二人稱「アナタ」に對する「ワタシ」の例として、「擬古」三を舉げる。

「擬古」三

仲春 時雨に遭い	仲春 時雨に遭い
始雷發東隅。	始雷 東隅に發す。
衆蟄各潛駭、	衆蟄 各の潛駭し、
草木從橫舒。	草木 從橫に舒ぶ。
翩翩新來燕、	翩翩たり新來の燕、
雙雙入我廬。	雙雙として我が廬に入る。
先巢故尚在、	先巢 故より尙お在り、
相將還舊居。	相將いて舊居に還る。

自從分別來、 分別してより來、
 門庭日荒蕪。 門庭 日々に荒蕪す。
 我心固匪石、 我心 固より石に匪ず、
 君情定何如。 君が情 定めて何如。

二月の半ば、春の雨が降り、春の初めの雷が東の空の彼方に轟いている。たくさんの蟲が、それぞれ（冬眠して）潜んでいたのが驚いて目覺め、草木は縱横に枝葉を伸ばしている。ひらひらと飛んでくる、やってきたばかりの燕。ひとつがい、ひとつがいと私の廬へとやってきた。昨年使った巢はもとのまま存在しており、連れ立って古巢へと歸ってきた。（あなたと）別れてから、庭が日々、荒れています。私の（隠棲の）心は、ぐらついたことはありません。あなたの情は、果たしていかがでしょうか。

この詩は、私の心とあなたの心が對比されており、私の心は燕が古巢にまた舞い戻ってきたように、本來の住みかを忘れることはないけれど、果たしてあなたは如何でしょうね、と些か皮肉を込めて詠じた詩である。末尾の「我心固匪石、君情定何如」において、「ワタシ」の心と「アナタ」の情が對比されている。元來、「ワタシ」と「アナタ」を對比させ

るのは最も基本的な對應關係である。『詩經』にも、數多くその例を見ることができる。例えば、鄭風「子衿」では「青青子衿、悠悠我心。縱我不往、子寧不嗣音（青青たる子が衿、悠悠たる我が心。縱え我往かざるも、子寧そ音を嗣がざる）」と詠じられ、「子」「我」と「我心」「子衿」の對が作られている。「ワタシ」と「アナタ」は、古來からの傳統的な對であるが、では、陶淵明「擬古」三に直接影響を与えた作品はあるのだろうか。晉の清商曲辭「冬歌」には、陶淵明「擬古」三に影響を与えたと思われる表現が見られる。

淵冰厚三尺、 淵冰 厚きこと三尺、
素雪覆千里。 素雪 千里を覆う。
我心如松柏、 我心 松柏の如し、
君情復何似。 君情 復た何にか似たる。

——「冬歌」

「我心如松柏、君情復何似」は、陶淵明の「擬古」に非常によく似た對句となっている。陶淵明で「固匪石」と表現されている箇所は、「冬歌」では「如松柏」と表現されている。「固匪石」は、『詩經』邶風・柏舟に「我心匪石、不可轉

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）

也。我心匪席、不可卷也（我が心は石に匪ず、轉ずるべからざるなり。我が心は席に匪ず、卷くべからざるなり）」とあり、石のように轉がり動くことがないという。「如松柏」は、『論語』子罕に「嘔寒、然後知松柏之後彫也（嘔寒くして、然る後に松柏の後れて彫むを知るなり）」というように、松や柏の木が、冬になっても衰えることがないのをいう。どちらも「ワタシ」の心が不變であることを詠じている。「冬歌」は冬の歌であり、陶淵明「擬古」は春の歌であることから、寒さに耐える松から轉がることのない石へと表現を變化させたのであろう。

陶淵明「擬古」三と「冬歌」は、このように似た表現があるが、さらに漢の相和歌辭「豔歌行」からの影響も受けているようである。「豔歌行」は『玉臺新詠』卷一、『樂府詩集』卷三十九に見える。

「豔歌行」

翩翩堂前燕、 翩翩たり堂前の燕、
冬藏夏來見。 冬藏るも夏來たりて見わる。
兄弟兩三人、 兄弟 兩三人、
流宕在他縣。 流宕して他縣に在り。
故衣誰當補、 故衣 誰か當に補わん、

中國詩文論叢 第二十八集

新衣誰當綻。新衣 誰か當に綻わん。
 賴得賢主人、賴^{さいわ}いに賢主人を得て、
 覽取爲我綻。覽取して我が爲に綻う。
 夫婿從門來、夫婿 門より來たり、
 斜柯西北眊。斜^{しや}柯して西北より眊る。
 語卿且勿眊、卿に語ぐ 且らく眊ること勿れ、
 水清石自見。水清まば石自^{みづ}から見る。
 石見何纍纍、石^{あらわ}見るること何ぞ纍纍たる、
 遠行不如歸。遠行 歸るに如かず。

「翩翩堂前燕」から始まるこの詩は、次のような内容である。旅先にいる作者は、衣のほつれを「賢主人」、賢い女主人に繕ってもらう。それを見かけた女主人の夫が、離れたところから、こちらを疑いの目で見ている。そこで作者はこういう、そんな目をしなさるな。水が澄めば、水底の石も自然に見ることができる。水底の石は、なんとも累々と重なっていることよ。遠く旅ゆくことは、歸るのには及ばないのだ。「豔歌行」の第一句「翩翩堂前燕」は、最終句「遠行不如歸」と強い繋がりをもっている。燕は冬にその姿をみられなくなるが、夏になるとまたやってくる。ところが、兄弟は他

所へ行つたまま歸つてこない。そして女主人の夫から疑いの眼差しを向けられた時、水が清らかならば、その底にある石は自ずからはっきり見えるという。心を澄ませれば、心の奥底にある意圖もはっきりするのである。「石見何纍纍」は、作者の心の奥底にある意圖が、非常にはっきりとしている事を言っている。その心とは何か。それは、女主人への邪な思いではない。衣を繕ってくれる親しい人のいない他郷に在り、女主人の親切によって故郷へ歸りたいと思う、望郷の心が引き起こされているのである。それが最終句「遠行不如歸」なのである。したがって、第一句「翩翩堂前燕」は、去つてもまた歸ってくる燕を詠じているのであるから、最終句「遠行不如歸」という作者の心とびつたり重なるのである。⁽⁵⁾

陶淵明の「擬古」三は、この「豔歌行」の「翩翩堂前燕」句を受け、「翩翩新來燕」と表現している。いささか文字が變わっているが、陶淵明「擬古」三はやはり燕が古巢に歸ってきたことを詠じている。つまり「翩翩堂前燕」「翩翩新來燕」どちらの句にも、遠く旅行く者に對して、「歸るべし」というメッセージを含んでいるのである。⁽⁶⁾このように、陶淵明「擬古」三は、「豔歌行」で古巢へ戻ってくる燕を詠じ、さらに「遠行不如歸」と詠じる旅先の男の心を持ち出し、最

後に「さて、そこであなたの心は、いったいどのようなのですか」という「冬歌」の問いかけをしているのである。「冬歌」の引用に加え、さらに「豔歌行」の句を使用することによって、「君情定何如」という問いを、ずっと重みのあるものにして

いる。

陶淵明「擬古」三には、作者から讀者である「君」へ向けて、「アナタはどうなのか」というやや皮肉っぽいメッセージが込められている。「君」は、おそらく、陶淵明との個人的交友関係にある誰かを指しているであろう。

陶淵明作品には、このように友人や知人に對して「ワタシ」と「アナタ」を對應させているほか、作品中で知り合いになった人物に對して使われるものや、家族に對して使われるものがある。

感・子・漂母惠、
愧・我・非韓才。
子・の・漂母の恵に感じ、
我・の・韓才に非ざるを愧づ。

——「乞食」

嗟・我・與・爾・、特迫常情。慈妣早世、時尙孺嬰。我・年・二・六・、
爾・纔・九・齡・。

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）

（ああ、我・と・爾・、特に常情に迫る。慈・妣・早世し、時に尙お孺嬰なり。我・は・年・二・六・、爾・は・纔・九・齡・）

——「祭程氏妹文」

「乞食」は、食料が盡き、あてもないまま人家を訪ね、食を乞ったことを詠じた詩である。餓えた作者に家の主人は食料を恵み、酒席を設けてくれる。その恩に感じ、感謝の心を詠じた箇所が上に挙げた二句である。二句には韓信の故事が踏まえられている。韓信は貧しかった時、漂母に食を恵んでもらった。韓信はやがて出世し、後に漂母に恩返しをしたという。陶淵明の二句はこの故事を踏まえ、「あ・な・た・の・漂母のような恵みに感じています、私・に・は・韓信のような才能がないことを愧ずかしく思う」と詠じている。ここにも、「アナタ」「ワタシ」の相対的な関係が存在している。また、「祭程氏妹文」は、程家に嫁いだ妹が死去し、彼女を祭った文である。ここに挙げたのはほんの一部であるが、作品中は一貫して妹を「爾」と呼んでおり、一人称「ワタシ」と「爾」の對應関係が見られる。「祭文」にはほかに「祭從弟敬遠文」があり、こちらは從弟を一貫して「爾」と呼び、「ワタシ」と「爾」の對應関係が見出せる。死去した親戚に對する祭文

中國詩文論叢 第二十八集

では、「ワタシ」と「爾」が非常に多く用いられている。「祭文」における二人稱「爾」は亡き人に對する感情的な表現といえよう。

作品のなかには、途中から「アナタ」の呼稱が使われるものもある。先にあげた「乞食」はそのひとつである。最初は「主人」という呼稱が使われ、その後、「子」が使用されているのである。このように、作品中で呼稱が「爾」や「君」などの二人稱に變化していくものを次にあげる。

「擬古」五

東方有一士、

東方有一士有り、

被服常不完。

被服 常に完からず。

三旬九遇食、

三旬に九たび食に遇い、

十年著一冠。

十年 一冠を著く。

辛勤無此比、

辛勤 此に比する無きも、

常有好容顏。

常に好しき容顏有り。

我欲觀其人、

我 其の人を觀んとして、

晨去越河關。

晨に去りて河關を越ゆ。

青松夾路生、

青松 路を夾んで生じ、

白雲宿簷端。

白雲 簷端に宿る。

知我故來意、

我が故來の意を知り、

取琴爲我彈。

琴を取り我の爲に彈ず。

上絃驚別鶴、

上絃は別鶴を驚かし、

下絃操孤鸞。

下絃は孤鸞を操る。

願留就君住、

願わくば留まりて君住に就き、

從今至歲寒。

今より歲寒に至らんことを。

「擬古」五では、まず「東方有一士」として人物が紹介される。作者陶淵明は「其人」に會いたいと思ひ、遠く山河を越えて出かけてゆく。その人の家は松が生え、白い雲がたなびいており、高潔な人であると分かる。作者はその人と意氣投合し、「君」の住まいにしばらく留まりたいという。「東方有一士」「其人」「君」のように、呼び名が變化しており、特に、お互いを知り合ひ、琴によって分かり合つたあととは、「君」という、相手への語りかけの口調になっている。個人的な、相互の關係が結ばれたことによって、一對一の呼びかけとして「君」が使用されているのであろう。

「我」や「君」などの「ワタシ」と「アナタ」の對應關係で詠うものは、歴史的に見ると男女間における思慕を詠じた詩の中に多くみることができる。男女の戀歌は、個人的な相

互関係によって詠われるものであるから、相手への語りかけに二人稱が使われるのは自然なことである。先に挙げた『詩經』鄭風「子衿」はその一例である。しかし、陶淵明においては、そもそも男女間の思慕を詠じる詩が少なく、知人・友人・血縁者らに對して「ワタシ」「アナタ」と詠じているものが主流である。しかし、女性への思慕を詠じた「閑情賦」には、「余」という一人稱は見えていても「君」等の二人稱は使われていない。この點は、注意が必要であろう。陶淵明が「ワタシ」「アナタ」と詠じるのは、知人・友人・血縁者が主流となっている。

次に、②二人稱「アナタ」以外の誰かと對比し、「ワタシ」と言っているものについて考察する。「ワタシ」と對比しているものは、世の中や人一般など、不特定の他人である。

歸去來兮。

請息交以絕游、
世・與我而相遺。

歸りなんいざ。

請う交を息めて以て游を絶たん、
世・と我は相い遺る。

——「歸去來兮辭」

陶淵明詩文における自己肯定的一人稱について（大立）

「歸去來兮辭」では、「ワタシ」と「世」との對比がなされており、これらは、他人と自分を比較し、他人と比べて自分はどうなのか、ということが示されている。多くの場合、自分は他人と異なることが示され、その後自己の獨自性が詠じられる。

先に考察した①「ワタシ」と「アナタ」では、作者と對象との間に比較的緊密な繋がりが存在していた。例えば、血縁関係や、友人知人の関係である。歴史的に見れば、戀愛を詠じる詩においても、「ワタシ」から「アナタ」への呼びかけが見られる。それは、兩者の間に、親密で個人的な関係が結ばれているからに他ならない。しかし、②では、「ワタシ」に對するものは不特定の他人である。「ワタシ」は、相手である誰かには會ったこともなく、漠然としたイメージや觀念と對比して、「ワタシ」自身を語りだしている場合が多い。例えば、世の人の生き方や、世間一般の價值觀など漠然としたものに對し、「ワタシ」の意見としてはこうである、という具合である。

次に、「雜詩」四を挙げる。「雜詩」四では、「丈夫」と「ワタシ」との對比がなされている。

中國詩文論叢 第二十八集

丈夫志四海、
我願不知老。
親戚共一處、
子孫還相保。
鴈絃肆朝日、
罇中酒不燥。
緩帶盡歡娛、
起晚眠常早。
孰若當世士、
氷炭滿懷抱。
百年歸丘壟、
用此空名道。

丈夫・四海に志すも、
我は願う 老を知らず。
親戚 一處を共にし、
子孫 還って相い保つ。
鴈絃 朝日を肆にし、
罇中 酒 燥^{かわ}かず。
帶を緩めて歡娛を盡くし、
起きるは晚く眠るは常に早し。
孰^{いずれ}ぞや 當世の士、
氷炭 懷抱に滿ち、
百年 丘壟に歸するに、
此の空名^{みちひ}を用って道^{みち}かるるを。

——「雜詩」四

陶淵明の「雜詩」四の大意は、次のようである。
男というものは、四海のような廣大な志を持つというが、私の願いは次のようである。年をとっても氣にならず、親戚一同、同じところに住み、子孫は助け合っている。朝な夕な、觴に樂器にきままに樂しみ、罇の中の酒は盡きることがない。帶を緩めて樂しみを盡くし、朝起きるのはゆっくりであり、

眠るのは早い時間がよい。どちらがよいだろうか。當世の士が、やれ名譽、やれ利益で心の中をいっぱいにし、百年経てば墓の中にいるというのに、虛名によって導かれているのは。

陶淵明の「雜詩」四では、「丈夫」に對する「ワタシ」の意見が述べられている。實はこの「大夫」は、曹植「贈白馬王彪」詩の「丈夫志四海」を引用したものである。それでは次に、曹植「贈白馬王彪」の一部をあげる。

丈夫志四海、
萬里猶比隣。
恩愛苟不虧、
在遠分日親。
何必同衾幃、
然後展慇懃。
憂思成疾疹、
無乃兒女仁。
倉卒骨肉情、
能不懷苦辛。

丈夫・四海に志し、
萬里 猶お比隣のごとし。
恩愛 苟しくも虧かざれば、
遠きに在りても 分日々に親し。
何ぞ必ずしも衾幃を同じくし、
然る後に慇懃を展べん。
憂思 疾疹と成るは、
乃ち兒女の仁なる無からんや。
倉卒たり 骨肉の情、
能く苦辛を懷かざらん。

——曹植「贈白馬王彪」

陶淵明の反駁は、第二句にある「我願」以降、第八句「起
晚眠常早」までである。老いを氣にせず、親戚は同じ處に住
み、子孫は助け合い、酒や音楽を好きに楽しみ、酒は盡きる
ことなく、帶を緩めて楽しみをなし、早く寝て遅く起きるこ
と、それが曹植の擧げる「丈夫」に對する「我」の願ひなの

次に、③運命や時間等、人以外に對して「ワタシ」が詠じられている例を挙げる。①や②で挙げた「ワタシ」は、人間同士の關係性の中で發せられる「ワタシ」である。つまり對人關係がそこには存在しており、家族に對する「ワタシ」、あるいは世の人々に對する「ワタシ」が詠じられていた。③では、人に對して「ワタシ」と言っているのではなく、日月や運命などに對して「ワタシ」というものである。

中國詩文論叢 第二十八集

善萬物之得時、萬物の時を得たるを善とし、
感吾生之行休。吾が生の行く休すを感ず。

——「歸去來兮辭」

日月有環周、日月環周有るも、
我去不再陽。我去れば再び陽ならず。

——「雜詩」三

「歸去來兮辭」では、「萬物」と「ワタシ」の人生を對比させている。萬物がその時を得て再び榮えるのに對し、自己の生命が死にむけて進んでいくことに對する感慨を詠じている。ここには、「萬物」と「ワタシ」との對應關係が存在している。また、「雜詩」三では、「ワタシ」と「日月」の運行を對比している。日月の運行は、去つてもまためぐつて還つてくるものである。しかし、私という人間は、一度（この世を）去れば、もう二度と歸つては來ない。めぐりゆく「日月」に對し、死ねばそれきりである「ワタシ」を詠じている。これらの「ワタシ」は、個人としての自分自身を指しているながら、一方で、人類全體の姿を背後に見出すことができる。例えば、「雜詩」三の「日月有環周、我去不再陽」において、

「日月」に對する「我去不再陽」の感慨は、作者個人の感慨でありながら、人一般に共通する運命によつてもたらされているのであり、萬人に共通する感慨と見ることが出来る。つまり、人類の一員としての「ワタシ」を詠じているのである。以下に、もう少し詳細に考察するため、「雜詩」三を全て舉げる。

「雜詩」三

榮華難久居、	榮華	久しく居り難く、
盛衰不可量。	盛衰	量るべからず。
昔爲三春菓、	昔は三春の菓爲るも、	
今作秋蓮房。	今は秋の蓮房と作る。	
嚴霜結野草、	嚴霜	野草に結び、
枯悴未遽央。	枯悴して未 ^{いま} 遽だ央きず。	
日月有環周、	日月に環周有るも、	
我去不再陽。	我去れば再び陽ならず。	
眷眷往昔時、	眷眷たり往昔の時、	
憶此斷人腸。	此を憶えば人の腸を斷たしむ。	

榮耀榮華は長く續くものではなく、榮枯盛衰は量り知るこ

とができない。昔は春の花咲く蓮だったのが、今は秋となり蓮房となっている。厳しい冬の霜が野草に降り、枯れはてた状態がいまだ盡きることなく續いている。日月は繰り返しめぐって来るが、私はひとたび去れば再び戻ってこない。往時を振り返りつつ、このことを思うと、斷腸の思いである。

この詩では、月日というものが、繰り返しめぐるものであるのに對し、「我」は一度死んでしまえばもう生き返ることが無いと言っているのである。「我」は、陶淵明個人であると同時に、それは人類全てに共通する運命といえる。「我」は作者を指しながら、實は水面下にある人類全體をも廣く含んでいるのである。それは、最終句「憶此斷人腸」で、「人」が使われていることにも端的に見ることが出来る。月日がめぐっても、死ねばもはや生き返ることは無い。それは人類普遍的運命であり、だからこそ、「人」の腸を斷つという表現につながるのである。「我」と「人」は、個別の字義は異なっているが、このように非常に近い意味を持つことがある。⁽⁷⁾

このように、萬物や日月に對比するときの「ワタシ」は、今ここで生きている個人としての「ワタシ」の意味に加えて、人類としての宿命を背負う者、すなわち人類の代表者としての「ワタシ」という意味を持つことがある。これは、これまで

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）

でみてきた①「アナタ」に對する「ワタシ」②誰かに對する「ワタシ」の二つが、個人として相手との關係性を強く有するのに對して、比較的大きな違いということができよう。

一人稱に着目すると、その對比する對象との關係のなかで、様々な意味合いが込められていることが分かった。基本的に、對應關係に着目すれば、上記①②③のような傾向を見出すことができるが、この他にも、自分自身をさらに強く印象づけようとする表現が見出せる。その例として、「榮木」四を舉げる。

「榮木」四

先師遺訓、	先師遺訓あり、
余・豈之墜。	余・豈に之を墜とさんや。
四十無聞、	四十にして聞く無きは、
斯不足畏。	斯れ畏るるに足らず。
脂我名車、	我が名車に脂さし、
策我名驥。	我が名驥に策たん。
千里雖遙、	千里 遙かなりと雖も、
孰敢不至。	孰か敢えて至らざらんや。

中國詩文論叢 第二十八集

先師である孔子は訓戒を遺し、私はどうしてこれを棄て去ることができようか。(孔子は) 四十歳になってその名を聞かなければ、畏るるに足らずといった。私は自分という名車に油をさし、私というすばらしい馬に鞭打とう。千里は遙か遠いけれども、到達できないことはない。

第二句の「余豈云墜」の「余」は、先師(ここでは孔子)に對して使われている。第五句と第六句「脂我名車、策我名驥」二つの「我」は、同じ字を繰り返すことで、自分自身を奮い立たせ、自己を強調している。さらに、繰り返すによる詩的なリフレイン効果も加わっている。

以上のように、一人稱には、何に對して、どのように使用されているのかに着目すると、様々な表現がなされていることが分かった。そしてさらに、以下にあげる「讀山海經」其一には、これらの基本的用法とはまた違った表現がなされているようである。次に「讀山海經」其一で使用されている「ワタシ」についての考察を行う。

3. 「讀山海經」其一に見る一人稱について

「讀山海經」一

孟夏草木長、 孟夏 草木長じ、

遶屋樹扶疏。 屋を遶りて 樹 扶疏たり。
 衆鳥欣有託、 衆鳥 託する有るを欣び、
 吾亦愛吾廬。 吾も亦た吾が廬を愛す。
 既耕亦已種、 既に耕し亦た己に種え、
 時還讀我書。 時に還りて我が書を讀む。
 窮巷隔深輶、 窮巷は深輶を隔て、
 頗迴故人車。 頗る故人の車を迴らす。
 歡然酌春酒、 歡然として春酒を酌み、
 摘我園中蔬。 我が園中の蔬を摘む。
 微雨從東來、 微雨 東より來たり、
 好風與之俱。 好風 之と俱にす。
 汎覽周王傳、 汎く覽る 周王の傳、
 流觀山海圖。 流觀す 山海の圖。
 俯仰終宇宙、 俯仰して宇宙を終う、
 不樂復何如。 樂しまざれば復た何如ん。

初夏、草木は生長し、家屋をめぐる樹木が茂っている。鳥たちはその身を託すところがあるのを喜び、私もまた、わたしの廬を愛す。すでに耕作を行い、また種をまき終わったので、時に家に歸って我が書物を讀む。路地の奥は、車の往

來がないので轍も刻まれず、知人も車をめぐらせ我が家には至らない。嬉しい気分て春にできた酒を酌み、私の畑でれた野菜を摘む。小雨が東より降ってきて、心地よい風は雨をとまなう。『周王傳』を廣くながめ、『山海圖』を眺める。俯仰の間に宇宙を極める、これを楽しまないで、いったい何を樂しむというのか。

この詩では、一人稱が四箇所使用されている。第四句「吾亦愛吾廬」、第六句「時還讀我書」、第十句「摘我園中蔬」である。「ワタシ」を繰り返すことによって、「ワタシは」と自己を強調したり、自己の獨自性を強調していると考えられる。しかし、そのほかにも表現するところがありそうである。まず、それぞれの留意点について確認しておきたい。

〔留意点A〕「吾亦愛吾廬」における、一人稱の繰り返しについて

第四句「吾亦愛吾廬」は、第三句「衆鳥欣有託」と對句となっている。鳥はその身を託するところを得て喜び、私はその愛する所としての、自分の廬を愛するという意味である。第四句「吾亦愛吾廬」では、一句五字のなかで、「吾」字が二回も繰り返されている。

陶淵明詩文における自己肯定的一人稱について（大立）

一句内で、「ワタシがワタシの何かを」という表現をするものは、古くは『詩經』小雅・出車「我出我車、于彼牧矣。自天子所、謂我來矣（我我車を出だす、彼の牧に。天子の所より、我に來れと謂う）」見ることが出来る。同じ言葉一句内で敢えて二度使うことで、言葉の調子を整え、歌謠としての良い響きをもたらしている。『詩經』では、一句内に同じ字を繰り返す表現がよく見られ、小雅の「出車」はその一例である。⁹ 陶淵明の「吾亦愛吾廬」も、繰り返すによる効果を生み出していると考えることができよう。

また、自分自身が、自分自身の廬を愛しているということを明示している点にも注意しておきたい。自己が自己の住みかを愛するという事は、強い自己肯定の表現といえる。

〔留意点B〕「廬」「書」「園中蔬」と一人稱「ワタシ」の結びつき

第四句「吾廬」について。第三句の「有託」と第四句の「吾廬」は、共に身をおちつけるところである。「廬」には、「吾」がわざわざ付されている。詩の大意を理解する上ではこの「吾」はなくても通じる箇所である。遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局 一九八三年）を調べると、僅かに辛

中國詩文論叢 第二十八集

延年が「我廬」という言葉を使用しているものの、その他に陶淵明以前に「我廬」「吾廬」を使用しているものは見られなかった。辛延年の詩は「羽林郎」と題されているもので、ある下僕が酒屋の娘をからかったが拒まれるというものである。「我廬」が使用されるのは、酒屋の娘の家の前を立派な役人が通りかかる場面で、「不意金吾子、娉婷過我廬」と詠じられる。陶淵明が「讀山海經」で、身を落ち着ける場所として「吾廬」といつているのとは、異なっている。また、陶淵明には「讀山海經」一で使用される「吾廬」のほか、「我廬」という語も見られる。「擬古」三の「翩翩新來燕、雙雙入我廬。先巢故尚在、相將還舊居」である。「廬」にわざわざ一人稱を付けて詠じているのには、陶淵明的な一つの表現と言えそうである。

第六句「我書」について。「我書」を読む動作主は、明示されていないが、私自身である。「(ワタシは)時に、歸宅して、ワタシの書を読む」という意味である。構造上は「吾亦愛吾廬」と同様、一つの句の中で「ワタシ」が二度繰り返される構造である。「我書」とは、具體的には、題名にある『山海經』を指し、また第十三、十四句にある「汎覽周王傳、流觀山海圖」の「周王傳」「山海圖」を指している。ここで、

「周王傳」「山海圖」に對し、なぜ「我」をわざわざ付加して「我書」と詠じているのであろうか。『先秦漢魏晉南北朝詩』では、「我書」を使用しているのは陶淵明の「讀山海經」一例のみであり、「吾書」については、全く使われていなかった。

第十句「園中蔬」について。上記と同様、明示されない「ワタシ」が、私の畑にできた「蔬」を摘むと詠じている。「蔬」とは、野菜を指している。わざわざ、私の畑の野菜とというのはなぜであろうか。「蔬」は、晉以降、詩に詠じられるようである。『先秦漢魏晉南北朝詩』には、張載「登成都白菟樓」の「蹲鴟蔽地生、原隰殖嘉蔬」(蹲鴟そんし、地を蔽いて生じ、原隰げんし、嘉蔬かふ殖ふゆ)、支遁「詠懷詩」の「霄崖育靈藹、神蔬含潤長」(霄崖せうがい、靈藹れいあんを育み、神蔬しんそ、潤うるを含んで長ず)、支遁「述懷詩」の「濯足戲流瀾、採練銜神蔬」(足を濯ぎて流瀾に戯れ、練れんを採りて神蔬しんそを銜くむ)、湛方生「後齋詩」の「茹彼園蔬、飲此春酒」(彼の園蔬くを茹くむ、此の春酒を飲む)の四例が見られた。張載の「蔬」は、祭禮における稻の別稱であり、支遁の「神蔬」は神仙や神靈といった超俗的、超人間的な植物の描寫として描かれている。どちらも、陶淵明のいう畑に植えた自家栽培の野菜とはかけ離れたイメージで描かれている。と

ところが、湛方生の「後齋詩」⁽¹⁴⁾は、陶淵明の描いている田園の生活風景に近い詩であり、「園蔬」の意味もよく似ている。湛方生「後齋詩」を挙げる。

解纓復褐、	纓を解きて褐に復り、
辭朝歸藪。	朝を辭して藪に歸る。
門不容軒、	門に軒を容れず、
宅不盈畝。	宅は畝に盈たず。
茂草籠庭、	茂草 庭を籠め、
滋蘭拂牖。	滋蘭 牖を拂う。
撫我子姪、	我が子姪を撫し、
攜我親友。	我が親友を攜う。
茹彼園蔬、	彼の園蔬を茹い、
飲此春酒。	此の春酒を飲む。
開牖攸瞻、	牖を開きて攸かに瞻、
坐對川阜。	坐ろに川阜に對す。
心焉孰託、	心焉に孰にか託さん、
託心非有。	心を託すは非有なり。
素構易抱、	素構 抱き易し、
玄根難朽。	玄根 朽ち難し。

陶淵明詩文における自己肯定の一人称について（大立）

即之匪遠、 即ち之れ遠きに匪ず、
可以長久。 以て長久たるべし。

——湛方生「後齋詩」

湛方生「後齋詩」と陶淵明「讀山海經」一を比較してみると、住居が世俗から隔たっている事（陶淵明「窮巷隔深轍」、湛方生「門不容軒」、自宅に豊かに繁茂する草木（陶淵明「孟夏草木長、遶屋樹扶疏」、湛方生「茂草籠庭、滋蘭拂牖」、友人についての言及があることも共通している（陶淵明は「頗迴故人車」といい、友人すらなかなか訪れないとされているが、湛方生は「攜我親友」と詠じている。ともに友人への言及である）。そして、蔬菜と春酒について、陶淵明は「歡然酌春酒、摘我園中蔬」といい、湛方生は「茹彼園蔬、飲此春酒」といっており、両者は非常によく似た表現をしている。陶淵明も湛方生も「春酒」と「蔬」で對句を作っていることは注意すべきである。

湛方生詩の題名「後齋」とは、長谷川滋成『東晉詩譯注』（汲古書院 一九九四年）に、「後方の部屋。離れ座敷」とある。陶淵明のように「廬」とは言っていないが、そこに描かれている情景や居住環境、たたずまいなどは、「讀山海經」と一致するところが多い。湛方生「後齋詩」の描く家の描寫は、

中國詩文論叢 第二十八集

陶淵明のそれと非常に近いといえる。

『東晉詩譯注』は、湛方生「後齋詩」「茹彼園蔬」の「園蔬」について、『後漢書』卷六十四・吳祐傳を引く。『後漢書』吳祐傳には次のような逸話を載せる。

祐在膠東九年、遷齊相、大將軍梁冀表爲長史。及冀誣奏太尉李固、祐聞而請見、與冀爭之、不聽。時扶風馬融在坐、爲冀章草、祐因謂融曰「李公之罪、成於卿手。李公即誅、卿何面目見天下之人乎？」冀怒而起入室、祐亦徑去。冀道出祐爲河間相、因自免歸家、不復仕、躬灌園蔬、以經書教授。年九十八卒。

(祐、膠東に在ること九年、齊相に遷る。大將軍梁冀、表して長史と爲る。冀の、太尉李固を誣奏するに及び、祐は聞きて見を請い、冀と之を争うも、聽かず。時に扶風の馬融、坐に在り、冀の爲に章草す、祐、因りて融に謂いて曰く「李公の罪は、卿の手に於て成る。李公は即ち誅せらる、卿、何の面目ありて天下の人に見えんや?」。冀怒りて起ちて室に入る、祐も亦た徑ちに去る。冀、出でて祐の河間相爲るを道つ、因りて自ら免じて家に歸り、復た仕えず、躬ら園蔬に灌ぎ、經書を以て教授す。年九十八にして卒す)

——『後漢書』吳祐傳

『後漢書』とは少し異なるが、吳祐が歸隱し「灌園蔬(園蔬に灌ぐ)」という事は、『藝文類聚』卷六十五・園にも見られる。『後漢書』のみならず『藝文類聚』にも收録されている点から考えると、この逸話は廣く知られていたものであったのだろう。『東晉詩譯注』が指摘するように、湛方生「後齋詩」の「茹彼園蔬」は、『後漢書』『藝文類聚』に見える吳祐の逸話を踏まえたものと考えられる。吳祐は歸隱してから再び仕えず、自ら畑の野菜に水をやり、經書を人に教授して暮らした。湛方生の「園蔬」を食すという表現には、歸隱して再び仕えることのなかった吳祐の生活スタイルを、暗に示しているのである。

湛方生と同様、「春酒」と園にある「蔬」によって對句を作る陶淵明「讀山海經」も、吳祐傳に見られるような自適の場を表現していると見ることができよう。⁽¹⁷⁾

このように、「廬」「書」「園中蔬」に一人稱「ワタシ」が付されるのは、些か特殊な用例であることが分かった。吳祐の故事や湛方生の詩に見られるように、庭や住まいが自適の

場であると考えれば、これらに一人稱が付されているのは自分の世界観や、自分の価値観を示すためではないかと考えられる。このような一人稱は陶淵明の他の詩にも見ることができ、以下に陶淵明詩に見られる、一人稱が事物と結びついて自分の世界観を示しているものを検討する。まず、「時運」詩を挙げる。

「時運」序

時運、游暮春也。春服既成、景物斯和。偶景獨遊、

欣慨交心。

(時運、暮春に遊ぶなり。春服既に成り、景物斯に和す。

景を偶して獨り遊び、欣慨心に交わる)

「春服」とは、『論語』先進の故事をふまえている。孔子が弟子に對し次のように尋ねる。「：居則曰、不吾知也。如或知爾、則何以哉(居れば則ち曰く、吾を知らずと。如し或もの爾を知らば、則ち何を以ってせん)」と。孔子がいうには、君たちは普段から『理解されない』と言っているが、もし理解されたなら、どうするのか、と。この問いに對して、子路・冉有・公西華がそれぞれ自分の考えを述べた後、曾皙が次のように

陶淵明詩文における自己肯定的一人稱について(大立)

答えた。

曰、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂。風乎舞雩、詠而歸。

(曾皙)曰く、莫春は、春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴す。舞雩に風し、詠じて歸る)

曾皙の答えを聞いた孔子は、「：喟然歎曰、吾與點也(喟然として歎じて曰く、吾、點(曾皙)に與せん)」といい、曾皙の言葉に賛同する。この故事を、陶淵明は「時運」序文で「春服既成」という言葉をそのまま引用している。またさらに、一首全體がこの曾皙の言葉を強く意識したものとなっている。

以上をふまえ、次に「時運」其一⁽¹⁹⁾を見てみよう。

「時運」一

邁邁時運、邁邁たる時運、

穆穆良朝、穆穆たる良朝、

襲我春服、我が春服を襲ね、

薄言東郊、⁽²⁰⁾薄く言に東郊す。

中國詩文論叢 第二十八集

山滌餘靄、山は餘靄に滌われ、
 宇暖微霄。宇は微霄に暖る。
 有風自南、風有り南よりし、
 翼彼新苗。彼の新苗を翼く。

「時運」一では、春のよき季節であることが詠われている。
 「山滌餘靄、宇暖微霄」は、暮春の季節の少しかすみがかつた風景が讀み取れるし、「有風自南、翼彼新苗」は、南からの温かい風が、芽吹いたばかりの植物の苗を育て、萬物を育む季節であると詠じられる。

「ワタシ」は、「襲我春服」、自分自身の春の装いを身に着けている。この「春服」については、序文とあわせて考えれば、曾皙の言葉をふまえているとすぐに分かる。また、序文に「偶景獨遊」の語が見えることから、一人での遊行であると分かる。しかし、なぜ一人での遊びなのか、なぜここで「ワタシ」が強調されるのかは、充分に明かされていない。

「時運」二

洋洋平澤、洋洋たる平澤、
 乃漱乃濯。乃ち漱ぎ乃ち濯う。

邈邈遐景、邈邈たる遐景、
 載欣載矚。載ち欣び載ち矚る。
 稱心而言、心に稱いて言う、
 人亦易足。人も亦た足り易し。
 揮茲一觴、茲の一觴を揮い、
 陶然自樂。陶然として自ら樂しむ。

其の二では、一人稱は使用されていない。風物が和らぎ、その風物が清らかで喜ばしいものであること、心に適う風景を樂しみ、飲酒を樂しむことが詠じられる。廣々とした流れ、遙かに廣がる風景は、序文の「景物斯和」という風景であるといえよう。其の二全體が喜びを詠じたものとなっている。

「時運」三

延目中流、目を中流に延べれば、
 悠悠清沂。悠悠たる清沂あり。
 童冠齊業、童冠業を齊しくし、
 閑詠以歸。閑かに詠じて以て歸る。
 我愛其靜、我其の靜を愛し、
 寤寐交揮。寤寐に交も揮う。

但恨殊世、但だ恨むらくは世を殊にし、
邈不可追。邈として追うべからざるを。

其の三では、季節・風景が心に適っているけれども、心に適わないものがあることを明らかにしている。序文「欣慨交心」の「欣」と「慨」が明かされている。

「延目中流、悠悠清沂」は、風景を楽しみながら、遙かに曾哲の言葉を思い起こしている。「清沂」は、曾哲の言葉にある「浴乎沂」を踏まえている。眼前にある河川を眺め、その風景に曾哲の言葉「清らかな沂」を重ねているのである。其の二から引き継ぎ、序文でいう「欣」が詠じられている。

第三句・第四句「童冠齊業、閑詠以歸」は、曾哲の言葉「冠者五六人、童子六七人、浴乎沂。風乎舞雩、詠而歸」を踏まえている。この二句は、實景ではなく、陶淵明によって想像された、曾哲の言葉の風景である。⁽²⁾ 河川の美しい風景が、陶淵明に古の風景を想像させているのである。「我愛其靜、寤寐交揮」は、曾哲の表現した世界が、陶淵明の強い思慕の対象であることが詠じられる。最後に「但恨殊世、邈不可追」といい、世の異なる現在、曾哲の言葉が現實にはなり得ない光景であると詠じられる。これが序文にある「慨」である。

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）

この「慨」は、「殊世、邈不可追」という現實が引き起こしている。曾哲の時代とは、時間的に遙かに隔てられ、またその風紀も異なっている。曾哲の世界は遙か遠く、及びもつかないものである、というのである。「殊世」には、時間的な隔絶のほか、世の趨勢の違いによる隔絶が含まれている。

「欣」は、春という季節、和やかな氣候、清らかな河川などの景物のすばらしさによって引き起こされた感情である。そしてこの春の情景は、曾哲の言葉と一致し、そののびやかな情景を想起させる。しかし、それはまた、曾哲の世界と作者のいる「世」との不一致も浮き彫りにしてしまう。思慕する情景や世界が、もはや及ぶもことのできないものであること、風景と季節だけがただ美しく、ただいたずらに曾哲の風景を眼前に展開していることを、意識せざるを得ない。風景が一致していればいるほど、人の不一致が浮き彫りにされてしまうのである。

「童冠齊業、閑詠以歸」が、陶淵明が風景を見ながら想像した風景であることは、序文からもまた知ることができる。「偶景獨遊」の「獨」に表現される現實の孤獨は、古と現在において、春の和やかな風景という共通項を持ちつつ、「童冠齊業、閑詠以歸」と詠われたような理解者が存在しない点

中國詩文論叢 第二十八集

で相違している。現實には、この春の遊行において、陶淵明は一人であり、そこに「童子」も「冠者」もないのである。ここに、感慨の深さがあるといえよう。（このような風景の一致と人の不一致を詠じたものは「時運」のみではなく、「擬古」四にもまた同様の表現を見ることができる。）

「時運」四

斯晨斯夕、斯れ晨 斯れ夕、

言息其廬。言に其の廬に息う。

花藥分列、花藥 分れ列なり、

林竹翳如。林竹 翳如たり。

清琴橫床、清琴 床に横たえ、

濁酒半壺。濁酒 壺に半ばなり。

黃唐莫逮、黃唐 逮ぶ莫し、

慨獨在余。慨きは獨り余に在り。

其の四では、自分の生活が廬の中での閑静なものであること、黃唐の生活を慕うことが詠じられている。第六句「濁酒半壺」までは、廬で草木に圍まれ、琴と酒を楽しむ、ゆったりとした生活が描かれている。この閑雅な生活よりは、まさ

に古の聖王時代の生活を彷彿とさせるものであろう。しかし、現實には、「黃唐」時代には及ぶべくもなく、さらにその感慨を共有する相手もない。古人が詠じたようなよき境地を今の私は享受することができない。このような感慨は、其の三でも詠じられていた。其の四ではさらに、その感慨を共有し分かち合えるものがない、「獨」が加えられているのである。「慨獨在余」の「獨」は、理解者のいない孤獨である。⁽²³⁾序文の「偶景獨遊」は、「冠者」「童子」もなく、古をよき時代として語らう理解者もなく、ただ一人、春遊する陶淵明の孤獨な姿を表しているのである。春という季節、風景のすばらしさを樂しみつつ、反對に、理解者のいない孤獨、手に入らない生活をただ一人嘆く、その「欣慨交心」のさまを「時運」は詠じているのである。

さて、ここでもう一度、其の一の「襲我春服」で、「我」字が使用されていることについて考えてみよう。「春服」は、曾皙の言葉を意識して使用された言葉である。「春服」は、春の装いであると同時に、曾皙の理想風景を一語で代表した言葉でもある。「時運」では、特に其の三・其の四で「ワタシ」が古を思い、黃唐の世界を慕っていることが詠じられ、

さらに、そうした感慨を抱くのは「ワタシ」のみであり、理解者のいないことが「慨獨在余」と明白に詠じられていた。

これらのことを考えると、「襲我春服」の「我」は、曾哲の世界を踏襲し、自己の世界観が曾哲の世界と一致することを、強く表現するために使用されたものだと考えられよう。つまり、境地や世界観の一致を強調しているのである。自己と対象の境地が一致した時、その境地が自分と同じであるという意味で「我」を使用しているのである。「我」は「ワタシ」と「春服」に象徴される曾哲の世界が、時間的な隔絶を超えて、共通した世界観のもとで一致していることを示しているのである。またここでは、同時代の世の人と自己を區別して、排他的に「他のひととは違う」という意味をも持っているのである。

このような「ワタシ」は、他にもある。次に「讀山海經」其四を挙げる。

「讀山海經」四

丹木生何許、 丹木 何れの許に生える、
 迺在密山陽。 迺ち密山の陽に在り。
 黃花復朱實、 黃花 復た朱實、

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）

食之壽命長。 之を食せば壽命長ず。

白玉凝素液、 白玉 素液 凝り、

瑾瑜發奇光。 瑾瑜 奇光を發す。

豈伊君子寶、 豈に伊れ君子の寶ならんや、

見重我軒黃。 我が軒黃に重んぜらる。

「軒黃」とは、黃帝を指す。古の聖王に對して「我が軒黃」といっている。この「我」は、私の敬愛する黃帝、あるいは私と世界觀を同じくしている黃帝、という意味であらう。

黃帝は、しばしば陶淵明の作品中に詠じられている。先にあげた「時運」詩の「黃唐莫逮、慨獨在余」のほか、「贈羊長史」詩の「愚生三季後、慨然念黃虞（愚は三季の後に生まれ、慨然として黃虞を念う）」を挙げることもできる。また「軒轅」という言葉によって詠じられているものには、「感士不遇賦」に、「望軒唐而永嘆、甘貧賤以辭榮（軒唐を望んで永嘆し、貧賤に甘んじ以て榮を辭す）」の句があり、古の達人が軒轅氏・唐陶氏を思慕したと詠じられている。このように、黃帝は思慕の対象としてしばしば詠じられており、この「讀山海經」其四の「我軒黃」の「軒黃」においても、思慕の対象とされていたことは明白である。

中國詩文論叢 第二十八集

また、「桃花源詩」では、「吾契」という言葉によって、自己の世界観を表現している。

奇蹤隱五百、奇蹤 隠ること五百、
 一朝敝神界。一朝 神界敝く。
 諄薄既異源、諄と薄は既に源を異にし、
 旋復還幽蔽。旋復して幽蔽に還る。
 借問游方士、借問す方に遊ぶ士よ、
 焉測塵囂外。焉くんぞ塵囂の外を測らん。
 願言躡輕風、願わくば言に輕風を躡み、
 高舉尋吾契。高舉して吾が契を尋ねん。

——「桃花源詩」

要約すると次のようである。桃花源は、五百年の間、閉ざされてきたが、ある日、その世界は開かれた。しかし、桃花源の「諄」なる性質と、外界の「薄」なる性質は、既に本質が異なり、桃花源は再び深く覆い隠されてしまったのだ。おたずねします、地の果てに遊ぶ方々よ。どうやって塵囂な人の世の外をうかがい知るのですか。願うところは、輕やかな風に乗って高らかに飛び上がり、私の世界を訪ねてゆくこと

なのです。

「契」は、自己の世界観と一致した境地を指す。⁽²⁴⁾「吾契」は、我が心に適う世界という意味であり、具體的に桃花源のことを指している。無論、陶淵明は、桃花源に行ったことはない。また、桃花源の地を所有しているのでもない。ここで使用されている「吾」は、「讀山海經」四の「我軒黃」と同様、その世界や境地が作者自身と一致していることを表現していると考えられる。

これらを考え合わせると、「讀山海經」其四や「時運」に使用されている「我」が、思いを寄せる相手との世界観の一致、境地の一致を表現していると考えられよう。思慕の對象に自稱「我」を付加することにより、ここでは、その境地・世界観が黃帝や軒轅氏と同じであることを表現しているのである。これらの一人稱は、自己の世界観を強く表現したものだと考えられるのである。

陶淵明は假託詩の中で、三良や荊軻を「ワタシ」と詠じることがある。これは、對象となる人物との完全な融和・一致の表現である。詠じる對象と一體化することで、その歴史的な體驗をよりリアルにより緊迫感をもって表現することがで

きるのである。本論文において考察した世界観の一致を強調する一人稱は、対象との完全な一體化ではないが、世界観や境地の一致を強く表している。思慕の対象は、あくまで対象のままで捉えられているが、境地は一致し、その世界は融和しているのである。

4. まとめ

それでは、冒頭で引用した「讀山海經」其一を再び見てみよう。

「吾亦愛吾廬」にみえる一人稱の繰り返しについて。「吾」字の繰り返しによるリフレイン効果を指摘することができる。また、「吾」は「鳥」と對比された一人稱であり、「鳥」が託するところを得たように、自分も託するところを得ていることを詠じている。二度「吾」が繰り返されるのは、鳥に對して「ワタシ」を強調し、自分で自分のことを、まるで自畫自賛するかのように賞賛していると考えることができる。それは、一つの自己肯定の言い回しであり、また自己完結とも捉えられよう。そして「吾廬」が、なぜ自己の愛するものの対象であり得るのか、「廬」字になぜ一人稱が付されているのかについては、以下に詠じられる「我書」「我園中蔬」の考

陶淵明詩文における自己肯定の一人稱について（大立）

察により明らかとなる。

「我書」について。農耕から還ったワタシが、「吾廬」で讀書をする。この「書」については、題名にある『山海經』および、「汎覽周王傳、流觀山海圖」にある「周王傳」と「山海圖」を指している。「周王傳」は『穆天子傳』を指し、「山海圖」は『山海經』に付加された圖を指している。これらの書物は、「答龐參軍」其一の「衡門之下、有琴有書。載彈載詠、爰得我娛（衡門の下、琴有り書有り。載ち彈じ載ち詠じ、爰に我が娛しみを得）」のような、「我娛」となるのである。「我書」に書かれている世界観と自分自身の境地が一致すること「我書」といっているのである。書物に描かる世界と自己の世界が一致し、それを我が物として、自由に遊び、楽しみとしているのである。

「我園中蔬」について。自分の土地、自分の酒、そして自分の庭の中の「蔬」や樹木の表現は、作品中でしばしば見つけられる。先に見た『後漢書』吳祐傳のように、役人として仕えることなく、家において生活を充實させるという態度が、園中の蔬菜を育て、その蔬菜を摘んで食すという詩的表現になっているのであろう。家や土地などは、陶淵明の生活の場であり、そこには、その生活様式や價值観、さらには世界観

中國詩文論叢 第二十八集

を見出すことができる。なぜなら、庭や園は、持ち主の心に適う場であり、世俗とは一線を畫した場所であるといえるからである。その自適の場、すなわち自己表現の場において、豊かに茂る樹木や野菜は、そのまま陶淵明の生活や境地が充實していることの表現であり、理想的生活が實現したものと見ることが可能であろう。この「摘我園中蔬」も、自分の生活様式の表明であり、なおかつ充實したものであることが読み取れるのである。「我」は自分の世界觀を強調するため使用されていると思われる。

ここで、「吾廬」についてもう一度みてみよう。「我書」を読み、「我園中蔬」を摘む、そうした生活の場が「吾廬」なのである。「ワタシ」が「ワタシ」の廬を愛する、その表現の裏には、自分の境地と一致する書物を讀む場があり、また「自身の生活様式を示し自適の場である場所」がそこに存在、確保されていることを讀み取ることができる。こうしてみると、鳥たちが自分の身を託す場を喜ぶのと同様に、「吾亦愛吾廬」というのは、自分に適った生活の場が、そこに實現しているのである。「讀山海經」其一の一人稱は、こうした境地・世界觀といったものを多分に内包した言葉なのであ

る。

「吾愛亦吾廬」は、このように自己肯定の表現と考えることができる。「吾廬」が自分の境地・世界觀の表現場所であると考え、この句は、次のように理解できる。わが廬、そこは自分自身の心に適う場所であり、隠者としての生活の場である、そうした心の適う場に自分が身を落着ける、そのような自分自身を私は認め、そうした境地・世界觀を私自身が愛しているのである、と。

「吾」や「我」は、譯せばどれも“わたし”であり、その人を指す言葉であることに違いない。しかし、それが何に對して使われているのか―親戚に對しているのか、日月の運行に對しているのか―によって、一人稱の詩的效果は變わってくるのである。そしてさらに「讀山海經」一のように、心や價值觀・境地が、自己との一致を示す一人稱も存在しているのである。陶淵明の作品には、「我」や「吾」の一人稱が多用されている。そのことは、世の中との差別化や相手への語りかけの用法のほか、自己の心のあり方を表現する意味もあったと考えられるのである。

【注】

(1) 陶淵明詩百五十八首、謝靈運詩百三十首。陶淵明「我」八十二例、「吾」十九例、合計一〇一例。謝靈運「我」二十六例、「吾」五例、合計三十一例。單純に計算すると、陶淵明詩では、二首中に一回以上「我」あるいは「吾」が使われている計算となる。一方謝靈運では、四首に一回以上という計算になる。

(2) 「時雨」は、その季節に降る雨のこと。ここでは、春の雨。

(3) 『玉臺新詠』卷十、『樂府詩集』卷四十四。『玉臺新詠』は「君情」を「君心」に作っている。

(4) 「斜柯」は、小尾郊一・岡村貞雄譯注『古樂府』（東海大學出版社 一九八〇年）によれば、斜めによりかかること。内田泉之助『玉臺新詠』（明治書院 一九七四年）は、「斜めに身を傾けること。一本には「斜倚」に作る、これは斜めに身を何かに寄せかけること」とする。

(5) 黃節注『漢魏樂府風箋』（商務印書館 一九六一年）に、清の李子徳の言葉が引かれている。「起」句如六義之興、以見久旅忘歸、不及梁燕之知時也。「石見何纍纍」、承之曰「遠行不如歸」、接法高絶。非遠行何以有補衣之舉、故蠲事思歸也」

(6) 沼口勝「陶淵明「擬古」詩考」（『立命館文學』五九八號 清水凱夫教授退職記念論集 二〇〇七年二月）では、「擬古」三が吳歌・西曲の用語を引いていること、さらに『易』卦爻

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）

および王弼注によって、東晉末期の混亂という寓意を読み取っている。ここでは、一人稱の使い方についての考察を主とするので、王朝混亂についての寓意については扱わないこととするが、歴來の注釋書が『詩經』の柏舟を當てていることに對し、「冬歌」のほうが相應しいと指摘している。この指摘は非常に適切だと思われる。

(7) 一人稱を用い一つ人類全體を廣く指すもの、あるいは、「人」といいつつ、その代表として自己を示しているものに、陶淵明の次のような作品を挙げられる。以下にその一例を示す。

壑舟無須臾、
引我不得住。
前塗當幾許、
未知止泊處。
古人惜寸陰、
念此使人懼。

——「雜詩」五

素標插人頭、
前塗漸就窄。
家爲逆旅舍、
我如當去客。

素標 人頭に插し、
前塗 漸く窄に就く。
家は逆旅の舍爲り、
我は當に去るべき客の如し。

中國詩文論叢 第二十八集

去去欲何之、
南山有舊宅。

去り去りて何くにか之かんと欲す、
南山に舊宅有り。

——「雜詩」七

邊雁悲無所、
代謝歸北鄉。
離鵲鳴清池、
涉暑經秋霜。
愁人難爲辭、
遙遙春夜長。

邊雁 所無きを悲しみ、
代謝して北郷へ歸る。
離鵲 清池に鳴き、
暑を涉り秋霜を経。
愁人 辭を爲し難く、
遙遙として春夜長し。

——「雜詩」十一

このような人類を代表する「人」については、井上一之「世說新語」に見える「人」の自稱詞的用法―指示の間接化意味するもの―（『中國詩文論叢』十七 一九九八年）に書かれている、一人稱としての「人」の用法と相通じる所があるようである。

(8) 「之」各本「云」に作る。「墜」は、落とす。袁行霈『陶淵明集箋注』に「之墜…猶「墜之」、實語前置。之…代指先師遺訓。墜…失落、此謂遺忘」とある。したがって、「之墜」は、先師の遺訓を忘れることを指す。「余豈之墜」で、私はどうしてこれ（先師の遺した訓）を忘れることがあるのか、の意。

(9) 例えば、小雅「采芣」の「昔我往矣、楊柳依依。今我來思、雨雪霏霏。行道遲遲、載渴載飢」にある「載」字の繰り返しや、小雅「蓼莪」の「父兮生我、母兮鞠我。拊我畜我、長我育我。顧我復我、出入腹我。欲報之德、昊天罔極」に見られるような、目的語に「我」字を連續使用するものなど、數多くみることができる。また、陶淵明の作品では、「止酒」詩に「止」字の多用が見られる。「止酒」詩では、各句に必ず「止」字が使用されている。これについては、范子燁「論「汝語」——一位亡國之君的諒詩——對「世說新語」『爾汝歌』的還原闡釋」（『中國文化』二〇〇七年第一期）に「爾汝歌」との關連が指摘されている。

(10) 『玉臺新詠』卷一および『樂府詩集』卷六十三に見られる。

(11) 「園」は、『陶淵明・文心雕龍』（世界古典文學全集 筑摩書房 一九八六年）の一海知義注に、「園は田畑をふくめた自分の土地」とある。

(12) 「蹲鴟」は、芋のこと。『文選』卷四・左太冲「蜀都賦」の「交讓所植、蹲鴟所伏」劉逵注に「蹲鴟、大芋也。其形類蹲鴟。故卓王孫曰、吾聞岷山之下沃野、下有蹲鴟、至死不飢」とある。

(13) 『禮記』曲禮下に「凡祭宗廟之禮、…稷曰明粢、稻曰嘉蔬」とあり、「嘉蔬」は「稻」を指していることが分かる。

(14) 『藝文類聚』卷六十四・居處部・齋に見える。

(15) 「心焉」は、長谷川滋成『東晉詩譯注』（汲古書院 一九九

四年)に、「焉」は助辭。『詩』陳風・防有鵠巢に「誰か予の美を俛さん、心焉に切たり」とある」に據った。

- (16) 『藝文類聚』は次のように記している。「又曰、吳祐遷膠東侯相。時濟北戴宏父爲縣丞。宏年十六。從在丞舍。祐每行園、常聞諷讀之音、甚奇之。與爲友。宏卒成儒宗、知名東夏。爲河間相、因自免歸家、不復仕。灌園疏、以經書教授。年九十八卒(又た(謝承後漢書)に曰く、吳祐、遷りて膠東の侯相たり。時に濟北の戴宏の父、縣丞爲り。宏は年十六。從いて丞舍に在り。祐、毎に園に行くに、常に諷讀の音を聞き、甚だ之を奇とす。與に友と爲る。宏、卒に儒宗と成り、名を東夏に知らる。河間の相と爲り、因りて自ら免じて家に歸り、復た仕えず。園疏に灌ぎ、經書を以て教授す。年九十八にして卒す)」

- (17) 齊藤希史「〈居〉の文學—六朝山水—/隱逸文學への一視座」『中國文學報』四十二 京都大學 一九九〇年)では、賦における居所についての考察がなされ、潘岳「閑居賦」では、特に自適の隱居が描かれており、おのおのその自得の場を得ている状態が描かれているとしている。本論文で述べた湛方生「後齋詩」や陶淵明「讀山海經」に描かれる庭もまた、こうした自適の場としての描寫であるといえる。また、裴泰然「屋宇…一個敞蝕的空間——響陶淵明「響山海將十三首其一」」(船山學刊二〇〇七年第四期)では、「讀山海經」其一にみえる部屋表現に着目し、外から部屋に入るの、閉塞陶淵明詩文における自己肯定的一人称について(大立)

ではなく、老莊的な別世界が開けてゆくことに繋がると指摘している。

- (18) 「景」は、汲古閣本注に「一作影」とある。この「景」については、袁行霈『陶淵明集箋注』(中華書局 二〇〇三年)に、「景…同「影」とあり、「影」と同義と解釋できる。
- (19) 汲古閣本には四つの區切りは見られない。今、湯漢注本に従い、「一」から「四」に分けた。湯漢注本は「第一章」のように「章」を用いているが、ここでは文章區分の「章」との區別を明確にするため、「其一」「其二」あるいは「一」「二」のように表記することとする。

- (20) 「薄言」について、一海知義の注釋(『陶淵明・文心雕龍』世界古典文學全集 筑摩書房 一九八六年)に「薄は無意味な發語の助字。いささか、しばらく等とよみなわわしている。言も助字」とある。『詩經』に頻出する語である。白川靜『詩經國風』(東洋文庫 平凡社 一九九〇年)周南・芣苢「薄言采之」注に「薄言…しばらくここに。詩に慣用する語」とある。

- (21) 「和」については、三枝秀子『たのしみを詠う陶淵明』(汲古書院 二〇〇五年)の「和」について「で既に考察が行われている。『和』は、春のおだやかさを表現するものとして陶淵明詩にしばしば登場し、欣びと深い關係にある言葉である。」

- (22) 吳瞻泰『陶詩彙注』王洪度の言葉に「第三首延目悠悠、即

中國詩文論叢 第二十八集

下不可追慕、乃遐想意中之事、非實寫目前之樂」とあるように、この章は、目前の樂しみを實寫したものではなく、心に思う風景を詠じているのである。

(23) 陶淵明の「獨」には、衆多なものに對する「獨」や知己・同志のいない「獨」など様々なものが存在している。ここでの「獨」はそのひとつである知己・同志のいない「獨」である。陶淵明の「獨」については、稿を改めて論じることにする。

(24) 『陶淵明・文心雕龍』（世界古典文學全集 筑摩書房 一九八六年）の「吾契」に對する一海知義注に「自分と契りあったもの、自分の理想とびったり一致したもの、桃花源をさす」とある。「契」字については、「癸卯歲十二月中作與從弟敬遠」詩においても使用されており、「桃花源記」と同様、世界觀や境地を指す言葉として使用されている。

「癸卯歲十二月中作與從弟敬遠」

寢迹衡門下、迹を寢す 衡門の下、

邈與世相絕。邈として世と相い絶つ。

顧盼莫誰知、顧盼するも誰も知る莫く、

荆扉晝常閉。荆扉 晝常に閉す。

淒淒歲暮風、淒淒たり歳暮の風、

翳翳經日雪。翳翳たり經日の雪。

傾耳無希聲、耳を傾くも希聲無く、

在目皓已潔。目に在りて皓く已に潔し。

勁氣侵襟袖、勁氣 襟袖を侵し、

簞瓢謝屢設。簞瓢 屢ば設くるを謝す。

蕭索空宇中、蕭索たり空宇の中、

了無一可悅。了に一に悦ぶべき無し。

歷覽千載書、歷覽す千載の書、

時時見遺烈。時時 遺烈を見る。

高操非所攀、高操 攀ずる所に非ず、

謬得固窮節。謬りて固窮の節を得たり。

平津苟不由、平津 苟くも由らざれば、

棲遲詎爲拙。棲遲 詎くんぞ拙と爲さん。

寄意一言外、意を寄す一言の外、

茲契誰能別。茲の契 誰か能く別たん。

人氣のない廬の中の様子が描かれる。樂しみの見出せないような物寂しい年の暮れ、讀書し、そこに古の賢人の事跡を見だし、「棲遲」「固窮節」への思いを深化させている。「寄意一言外、茲契誰能別」は、題名にある從弟の敬遠に對する言葉である。思ひは、言外に寄せられている、君（敬遠）以外に、この境地を誰が分かってくれるだろうか、と詠じている。この詩では、「吾」ではなく「茲」字が使用されているが、前後文脈から判斷すると、「茲契」は、書物によって結び付けられた、古人の世界、あるいは古人の體現した境地を指しているのである。

「契」は、「桃花源詩」の「吾契」と同様、世界観や境地の意味で使われているのである。

陶淵明詩文における自己肯定的一人称について（大立）